

文 論

山下守胤と松浦守美の俳諧一枚摺

Haikai Ichimaizuri : The Poetry and Printed Art of Moritane Yamashita and Moriyoshi Matsura

大西紀夫

OONISHI Norio

山下守胤

山下守胤は富山藩のお抱え絵師で、狩野派。平吹町の藩御用の染物紺屋の山下屋に天明六年（一七八六）に生まれる。家業を継がず、森探玉齋に絵を習い、のちに江戸に出て狩野派の画法を学ぶ。帰郷後、十代藩主前田利保に取り立てられ、絵を指南する。藩士として徒組から新番組に登用される。嘉永年間、利保によって編纂された彩色絵入り本草書『本草通串証図』の下絵を木村立嶽、山下式胤、松浦守美らと描く。守胤は俳諧も嗜んだ。明治二年（一八六九）没。享年八十四。

守胤が挿絵の下絵を描いている俳諧一枚摺は、現在五点確認することが出来たので、以下紹介する。

山下守胤の一枚摺

- ①河豚に葱の図 嘉永年間 清水家蔵
- ②牡丹の木に鳥の図 水見江連 天保頃 中島俊夫氏蔵
- ③河骨に蜚の図 天保頃 同
- ④蛭を採る図 嘉永頃 架蔵
- ⑤正月飾りに富士の図 申とし（嘉永？） 同

これらの一枚摺のうち①は大西紀夫「越中の絵入り俳諧一枚摺と絵師達」〔富山短期大学紀要〕第43巻 平成20年3月）に翻刻紹介済みである。今回は個人蔵の②～⑤を翻刻紹介する。うち④、⑤は近年架蔵に帰したもので、『富山新聞』平成22年5月11日朝刊に紹介された。

②牡丹の木に鳥の図（守胤画）多色摺（二色）

横半裁（18・5×51・1）



②牡丹の木に鳥の図

養父入や雨空ながらいとまごひ

有曹

素謡の声も通るや春の雨

花亭

水に入やうに川越乙鳥かな

竹賀

茨の木をのけて居すはる躑躅哉

其玄

藪人の貌見ぬ先の便りかな

面康

大事もない留守あづからぬ梅の月

晴涯

燕の影や顔ふる繋ぎ馬

芝生

取いそぎする福引の笑貌哉

馬年

山吹は地もついやさぬ垣根かな

ト山 為由

鶯の声にふくむや日の暖み

フシキ 和鳴

一しきり空に居るや揚雲雀

フクラ 貞松

家あれど戸窓のなくて野梅哉

在京 梅室

草萌や折く子供呼に出る

文友

雪解や井戸へもさして貰ひ水

熙載

癖にして梅の所望や婆々が家

梅邑

風の間やふりかたねたる走風

文恕

いつの夜も影定まらぬ柳哉

里曉

うぐいすや置替て鳴別座敷

雨耕

明地から紙鳶つれて来て町の中

漢龍

馬の荷の自由にならぬ雪消哉

竹雄

門口を覗き定てはつ乙鳥

梧栖

かゝえ地に見て置いて取落の台

素静

爐の^{しべ}新部をはなれて幾夜猫の恋

六葉

氷見江連

所収の桜井梅室の発句「家あれど戸窓のなくて野梅哉」は『増補万円発句集』（天保13）に載せる。したがってこの一枚摺はこの頃のものと云う。

③河骨に蛭の図（守胤画）多色摺（四色）

四裁（18・8×25・8）



③河骨に蛭の図

蝶々や藁に生れて火とりむし

柿丸

藤の根は山からさして清水かな

梧栖

山ばなれして風涼し小石川

竹雄

待たほど余計に聞けず時鳥

洲静

着のまゝに這入ば帯にかゝる蚊屋

貞松

麦秋に手伝ふ嫁も見たりけり

沢龍

一曲りまがる山田の田植かな

文恕

卯の花に夜明の近き障子かな

五竹

振舞や馳走のうへのゆふ涼

里暁

蚊屋釣て寝所の違ふ大家かな

吐六

植仕舞ふ田尻の風の渡りけり

胡齋

船頭の売買さきや夏羽おり

梅邑

かきつばた所望をまたず半開

素静

簀屏風に色もとゞめずもる青田

六葉

②、③は氷見の俳諧一枚摺である。主催者は六葉で、紺屋伊左衛門を名乗り、氷見町の算用聞などの町役人を勤めた。弘化三年（一八四六）十二月十三日没。享年六十六。したがってこの二点とも弘化三年以前の一枚摺である。氷見の俳諧一枚摺は、今日ほとんど残っておらず、大変珍しい。②の一枚摺に見える伏木の和鳴は有名な能登屋三右衛門。弘化四年二月十二日没（九起編『花供養』弘化4）。福浦の俳人貞松も載っていて、北前船などの海上交通によって氷見と能登との交流が密接であった

ことがわかる。なお、中島氏蔵のものには、他に氷見関係のものが数点、能登のものも数点あった。

④ 蛭を採る男の図（守胤画）多色摺（三色）

横半裁（18・2×50・9）



④ 蛭を採る男の図

老の春梅寒し雪処く

龍夫

連翹やもろき石井の遣ひ水

竹岷

うみ芋よりながき嘶しや弥生尽

都盤

春雨の壁をつたふや下地まど

和水

大こんの花やぐるりを田にかへす

卜少

寺町は柳でくらしき月夜哉

月茄

雉子なくや窓から見ゆる雑木山

如蓼

折に出た梅に鶯の羽かげかな

五夕

藤さくや友まち侘て寝つおきつ

藍波

山吹の流れ見通す出むらかな

僧 蘭菅

是ほどの川に音なし弥生尽

可庭

利わけて家の名付ける茶壺哉

里白

不図と出て二日旅する弥生かな

蚊里

巢ばなれも最う四五日や雀の子

免園

嫁もらふ家見に行やはるの月

其瓶

難波女の夜川をわたる桜哉

月笑

くれかねてあるや弥生の西あかり

ヨカタ僧 無外

花の月人のこゝろもひらきけり

トミサキ 蘭秀

月匂ふ梅の障子の墨絵哉

ヤツオ 戸方

まはり道する松ばらやきじの声

、 亀翠

帯ほどに霞のひくや山のこし

、 玉永

はる風やまふて流るゝ冬の泡

、 茶掬

道ばたにこぼれ鳴する田にし哉

竹延

菜の花やはぐれた人のくる日暮

其園

折あとの見へぬさかりや山つゝじ

眉淵

貝の名の聞かでおかしき汐干かな

学葵

火のもちのよいわら灰や桃の花

其竹

なの花や曇つた空のとり直り

西江

山吹やぐるりの垣にそふた水

青波

苗代のおだれをくゞる蛙かな

素邦

勝手から見ゆるところを苗代哉

柳渚

寝させたる藍のいきりや春の雨

葵堀

梅に袈裟引かけ行や鐘楼堂

僧 鶴鳴

ふる舞やあけても行ず雛の供

董所

斧おとの花を遠のく端山かな

文壁

白むめやかに埋りて真さかり

白雪

釣瓶竿持はづしけりわかれ霜

和景

涉し場の人声するや霞む中

斗詳

翌日もくる水とおもへど春くるゝ

鳩斎

主催者の鳩斎は、坂可庭編『袖眷集』(嘉永2)所収である。ほとんどが

越中の俳人で、富山町の人を中心である。嘉永頃の一枚摺か。

⑤正月飾りに富士の図(守胤画)多色摺(五色)

福藁や裾風あらしき麻袴
遙拝の神も都合の恵方かな
手を膝に鶯まつや朝ぐもり

梅室
北園
貝山



⑤正月飾りに富士の図

横半裁 (18・5×50・9)

相啼は妻うぐいすか神の杜

豊収

馬の背に飛なぐさみや肩の猿
畑に根を残すのも有若菜かな

呼亭
斗和

夢見までよき楽みや明の春

桃下

沖鳴のやむ曙やはつ蛙

木圭

三日月を棟にひかへて飾り松

東雅

春たつや山水はしる響きより

丹嶺

おくれじと矮鶏の初こゑ健気なり

鹿裘

手休めを星見に出たり齋打

大夢

ゆとりある声をかさねて初がらす

卓丈

次第して梢にのこるはつ日哉

柳壺

更ほどしたしみ見へて月と梅

鶯呼

言合たやうに出あふ若菜摘

賀水

大杉にひとり戦くやかゝり風

花精

鶯の隙に蓋とる井筒かな

恕兮

元日や濡さで済す菜包丁

竹外

鉢植の数にはいるや露の台

帰厚

初とりや世はまだ宵の人通り

在府
弧白

若水や千代の松葉の汲上る

月笑

はつ空や気の落着し山の晴

里白

三日月の松にかゝるや藁わら盆子

東齡

文箱から出たて七草揃ひけり

鳩斎

音高う若水くむや夜の内

奇雲

鳥追や汀つた迄も祝ひたて

子愿

淡雪やつくねたまゝの哥がるた

西江

弓はじめ金剛草鞋もたせけり

珠卜

透を得て出店の年賀請にけり

廉夫

元日立春

たつ雲のこゝろ有げや今朝の春

都盤

申とし

主催者の都盤は富山の俳人。冒頭の梅室の発句は『双玉類題集』（嘉永3）に載る。したがって「申とし」は、嘉永二年戊申の年である。所収の俳人は、加賀藩、大聖寺藩、富山藩の俳人合同の一枚摺である。

松浦守美

狩野派の絵師。絵師松浦安兵衛（雪玉斎春信）の子として八人町に文政七年（一八二四）に生まれる。通称は安平、応真斎と号する。若年富山藩のお抱え絵師山下守胤に絵を学ぶ。富山藩主前田利保の絵所預となり、師の守胤とともに『本草通串証図』の下絵を描く。守美は明治になって多くの売薬版画を描く。今日残るものだけでも二百点余ある。ほかに絵馬や絵入り俳書や絵俳書の下絵も描いた。また、今回の調査で、多色摺の俳諧一枚摺の挿絵の下絵も多く描いていたことがわかった。明治十九年（一八八六）没。享年六十三。

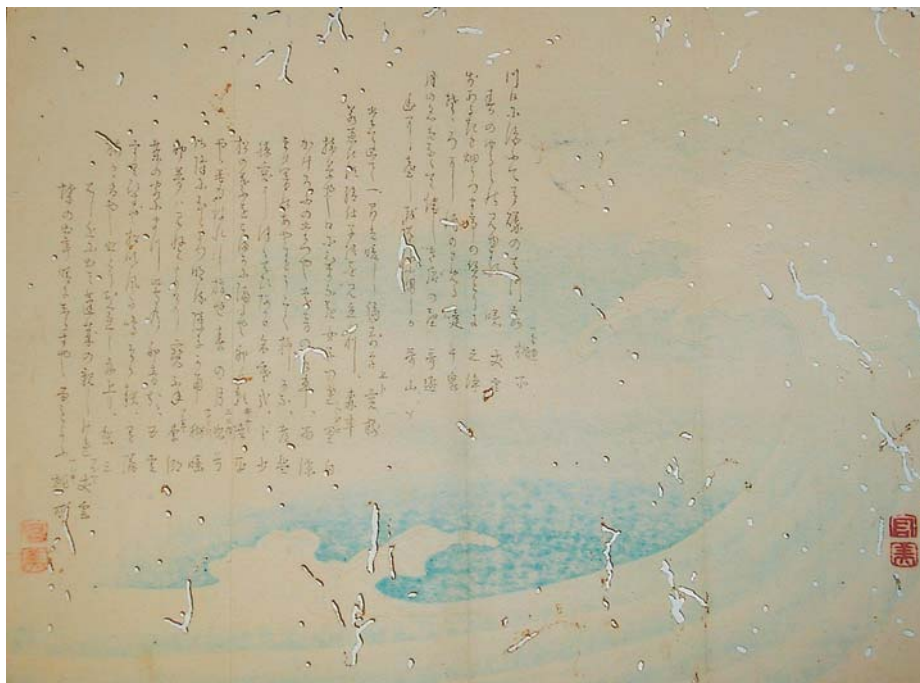
守美の一枚摺について、筆者がこれまでに見つけたものが、十八点あった。以下の通り。

松浦守美の俳諧一枚摺

- ① 松葉に梅の枝の図 八重ノ社中 明治十年 清水家蔵
- ② 雷神図 酉の春（万延2）同
- ③ 里芋の図 安政年間 同
- ④ 香炉の図 同
- ⑤ 盃の図 同
- ⑥ 蜃気楼図 嘉永年間 同
- ⑦ 笛の図 折橋家蔵
- ⑧ 扇の図 午の春興行 同
- ⑨ 武士の図（袴の佩刀の十村）同
- ⑩ 杖の図 未の春 同
- ⑪ 董の図 同

- ⑫放生津八幡宮の家持の歌碑の図 安政四年巳初春 同
 - ⑬波頭の図 幕末 岩倉家蔵
 - ⑭煎茶の図 甲子の秋(元治元) 早稲田大学付属図書館蔵『摺物句帖』所収
 - ⑮大盃を持つ猩猩の図 丁巳のとし 個人蔵
 - ⑯橋を渡る番傘を差す後姿の男の図 架蔵
 - ⑰月に鴉の図 同
 - ⑱朝顔の図 同
- これらの一枚摺のうち①～⑥は岩瀬の清水孝一氏所蔵のもので、現在は富山郷土博物館蔵である。保存状態が大変よく版画の挿絵の色も鮮明である。このうち、すでに①、②は『東岩瀬郷土史会 会報102号』に翻刻紹介した。また③～⑥については、「越中の絵入り俳諧一枚摺と絵師達」(『富山短期大学紀要』第43巻 平成20年3月)に紹介した。このうち、方々で若干のものが見つかった。⑦～⑫は射水市島の十村折橋家で見つかったもの。このうち、⑫の放生津の万葉の歌碑の図については、『富山新聞』平成21年11月20日の朝刊で紹介され、詳しくは「越中の絵入り俳諧一枚摺と絵師達」で翻刻紹介した。他の⑦～⑪については、拙稿『折橋家の俳諧』(『早稲の香』第18号)で翻刻予定。⑬は井波の酒屋の岩倉家(屋号高瀬屋)で見つかったもの。また、⑭は早稲田大学付属図書館蔵『摺物句帖』にあったもの。⑮は個人蔵。⑯～⑱は守胤の一枚摺と同じく近年筆者の架蔵に帰したものである。

⑬波頭の図(守美画) 多色摺(一色・空摺)
四裁(19・0×25・8)



⑬波頭の図

川口に添ふて有磯のはつ霞	フシキ連	桃所
春のゆるみの見ゆる曙		丈雲
歩あるきも畑うつまでの賃とりに		之浄
そゝろに酒のさめる嚏		千泉
月の名はなくて侘しき後の望		哥遊
幽に声をはこぶ小男じか		哥山
たて込で一間は暖し福寿草	エド	寛樹
若恵比寿給仕子供を見立けり		森半
摘草や口にひまなき女子づれ	トヤマ	里白
かげろうのたつや遠音の水車		雨濂
宵闇のあやにもうごく柳かな		都盤
膝突につくばいあがる余寒哉		卜少
松の葉をこまかに漏るや初日影	井ナミ	陸平
や、雨のはれし梢や春の月	三日市	恕兮
初夢は見ねどたりけり宝ぶね	フシキ	李郷
茶の客にまづ鶯の初音哉		五雲
うぐいすや松吹風に鳴そゝる		有隣
梅が香やひとりおくれし舟上り		梨三
はし近に出て蓬萊の親しけれ	アンヤ	丈雲
蝶の出で晴にしらずや雨もよふ	フシキ	桃所

主催者の桃所は「フシキ」と記すが、幕末期の諸俳書では、富山の人で

ある。伏木連を指導していたものか。井波の陸平は岩倉家の先祖で、高瀬屋与右衛門。『己之中集』（天保5）所収で、井波俳壇の中心的俳人。挿絵の波頭の輪郭は空摺りの技術を凝らしており、これは⑥の挿絵の蜃気楼の輪郭と同じである。

⑭煎茶の道具に月の図（守美画） 甲子の秋（元治元）多色摺（三色）

四裁



⑭煎茶の道具に月の図

大岩山に詣で、

秋風や人の稔りつく瀧の糸	悠平
漕よせる舟に音なきすゝきかな	和全
手いれせぬ菊も又よし藪の腰	秀艸
うぐいすに似た鳥見るや夕紅葉	応和
表具師の手元も見たし秋のくれ	起文
松風も詫しき庵の礎かな	三甫
荏残すものは案山子ぞ門ばたけ	杉青
入残る月の明りや渡り鳥	梅碩
さつと来る風や花野の上すべり	為成
名月やからすも鷺も同じ陰	克哉
さびしさや舟引網にちる柳	北梅
鹿鳴や草鞋はけば旅ごゝろ	友美更幽扉

甲子の秋

「甲子」は、元治元年（一八六四）である。金沢の俳人句空庵悠平の上市大岩山参詣記念の俳諧一枚摺である。主催者の友美更幽扉は、『荒磯集』（元治元）『花供養』（元治二）所収。上市の人か。なお、悠平は明治元年に雪袋と改号する。金沢の俳諧宗匠で、越中、能登へもさかんに遊歴を試み、多くの門人がいた。ほぼ二百六十年以前の元禄年間、初代の句空庵句空が、眼病治療のため大岩山に二度にわたって足を運んでいる。悠平は継承した庵号にゆかりのある場所を尋ねたのである。

⑮大盃を持つ猩猩の図（応真斎守美画）多色摺（三色）

縦半裁（35・5×25・3）



⑮大盃を持つ猩猩の図

ことし還暦のはるをむかひ
跡見帰れば何の功もあらず
はづべし。されど予無事に
過にしことこれ神仏
国君家祖世々の潤恩の
ふかきを朝夕仰ぎ奉りて
斯はべりぬ

来た跡を見帰るばかり花の春

白圭

家夫と、もに聖節の

寿を祝して

元日や身がまへ高き舞扇

希水

いさぎようきくうれしさやはつ鴉

少年 伯峯

丁巳のとし

「丁巳のとし」は安政四年（一八五七）のこと。水橋の俳人白圭の還暦の記念の一枚摺である。白圭は英国の詩人イエイツの研究の権威で、日本イエイツ協会初代会長の尾島庄太郎氏の御先祖である。生家はブリの網元であった。

⑩橋を渡る番傘を差す後姿の男の図（守美画）多色摺（五色）

横半裁（18・6×50・7）

吹降のうい日にまけて時雨けり

雨遊

荒尻や新田の鴨の坐争ひ

晚籟

用に来て手伝ふ雪の戸口かな

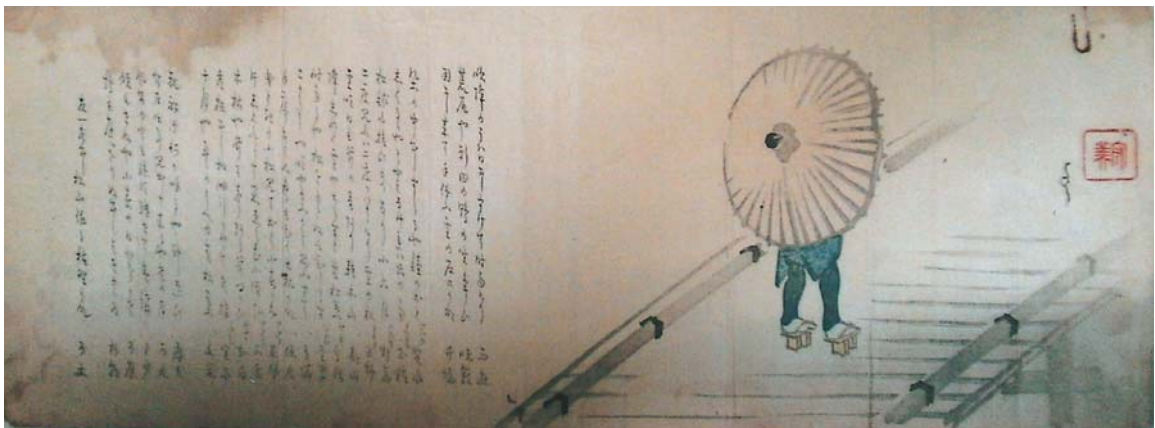
竹塙

凧の中にまじるや鐘のおと

ツハタ 賀水

しぐるゝやとやみなければ只の雨

タカオカ 花精



⑩橋を渡る番傘を差す後姿の男の図

松毬も拾ひものなり小六月	小スキ	勢斎
二度見れば二度かはりけり雪の松	トイテ	五柳
雪吹日も斧の音あり雑木山	、	都山
降しめた雪やちらりと敷松葉	ヤキ	高梧
時雨るや松をもたぬもひとかり	ハンニヤ	雪幸
こがらしや吹やもふかと思ふまで	、	有隣
手序に人參もひく大根かな	、	保丸
曳ときの小松見ておく小春かな	フクノ	成鳳
片しぐれして窓ゑらむ小僧哉	フクミツ	不玄
木枯や斧に声ある斧つかひ	井ナミ	知白
看板に桐油引かけて冬構	ミツハシ	定爾
十月や豊のうへの青松葉	、	文器
親船で何か呼るや神迎ひ		廉夫
背戸仕事見出して来るや冬の月		可九
風呂の火も絶ず継せて戎講		卜少
傾もせぬや小春の日からかさ		可庭
鶏も庭へ下りぬにみそさゞる		杉朝
夜一夜に松山作る枯野かな		可丈

主催者の可丈は、能登の俳人梅明編『増穂集』(弘化3)に「エツ中 可丈」として載る。越中の人であるが、これ以外の俳書には見えない。こ

の一枚摺は越中の俳人中心のものである。なお、「ハンニヤ 雪幸」は現在の砺波市太田の安念雪幸である。通称は安兵衛。嘉永五年二月十二日没。従ってこの一枚摺は嘉永五年以前のものである。水橋の桜井家の文器、定爾が参加している。

⑰月に鴉の図(守美画) 多色摺(二色)

横半裁(18・7×50・3)



⑰月に鴉の図

足もとは山道なれど花野かな
蚊屋を出て実初秋と思ひけり

梅室
塞馬
戻る連こしらへて来て紅葉かな
世話ぶりに兼たる菊の所望かな
椿国
曾庸

ふらさらと出あし序の萩見かな
秋の蚊や昼ともいはず鳴て来る

竹塙
賀水
遊ひ日はおふかた済て後の月
暑かつた噂して居る夜寒哉
折取て見たれば薄し夕紅葉
何処に道ありて廻るや唄の鹿
朝貌も垣もみだれて露しぐれ
売程は誰も作らず唐がらし
旅の灯に尾花の風の通ひけり
一ツふたつ三ツ四ツ五ツ雁の竿
露の干ぬうちと争ふ萩見かな
田の明て花に成けり疇の草
挨拶のある間菊見や駕の供

寝惜でたゞ焚火なり秋の雨
あまつのは落ぬ気色也桐一葉

ハンニヤ
雪幸
雲雄
東イハセ
宇兆
李水
其諺

客の去た跡に並ぶやあきの蠅
しら菊にはつと紙燭のとゞき鳧

東イハセ
仕候
君風
古井戸の綱にもたれて草の花
笥堂

露早し雲焼うつる草の先
鬼灯や細い道ある藪の中

可庭
遊夢
瓢亭
可丈

露までに匂ひうつりに柚の盛
草中や河魚が飛ぶ落し水

知夕
至雪
屠龍
冒頭の梅室の発句は『双玉類題集』(好文堂刊 嘉永3)に載るから、こ

後には火のほとりして後の月
日の出てもひるまぬ声やきりぐす

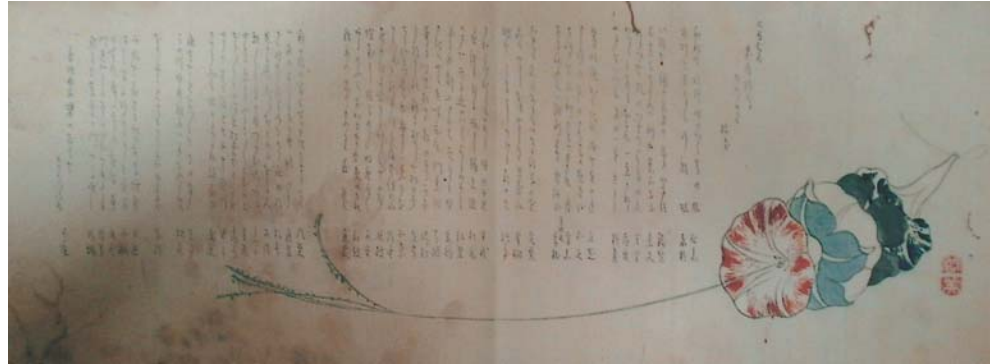
屠龍
紅葉してくらき木の間もなかりけり
落栗のふたつ並ひぬ石の上
柿の葉に煙草火のせて月見哉

紅葉してくらき木の間もなかりけり
落栗のふたつ並ひぬ石の上
柿の葉に煙草火のせて月見哉

月笑
露石
其瓶
⑱朝顔の図(守美画)多色摺(六色)
横半裁(18・7×50・3)

二間三間団扇拾ひに歩行けり
 初秋や始終眼のつく蔦の風
 鬼灯や売としぐゝの投磔
 八朔や踊る景気のまだやまず

梅室
 北山
 我柳
 錦賀



⑱朝顔の図

古笠でなければ利ぬ案山子哉
 秋たつや風をつまづく草の丈
 かるゝと落て動かぬ一葉かな
 七夕やいつもこの日は暮遅し

素文
 天笠
 応叟
 柳壺

明日の漁おもはぬ浦や盆の月
 さし汐の戸口まで来る夜寒哉
 虫鳴や山科まではもたぬ月
 客に添ふて一徳利来る新酒哉

文器
 山更
 幸山
 雪杖

これも名のなくてはならず草の花
 名もやさし花もやさしき野菊哉
 蛸や高音になけど秋の虫

充魚
 空嗣
 淇亭

夕むくげ駕たてかけし垣のゆれ
 一夜経て新に涼し颯の波
 七夕や夜に延のつくははじめらし
 我と我軒にさめて夜寒かな
 ささへゆく連呼戻す門茶哉
 薺につれなき松の雫かな
 今朝からの秋に烈しや松の声
 ちりひとつ見へぬ畠に一葉かな
 きらゝと秋たつさまのこぼれ水

寸龍
 松元
 超翠
 霞朗
 青波
 晴江
 立芳
 五葉
 清由

籠の目に髭さし出して虫の声	林坡
蛸壺に植てもらひぬ唐がらし	可由
あと追ふて露かさなりぬ蔓のさき	江波
稲妻の光りもつるゝ藪見て	鹿裘
秋の蚊の背もならさずとまり鳧	風翠
一遍の曇りとなりぬ鴨の声	積翠
さゞ波にへだりつきけり秋の風	松亭
見るよりは楽しきものをかをどる人	久傍
軽々と草の穂つかむ蜻蛉哉	みつ女
ゆれる葉にふとりくゝて露の玉	方居
ちらくゝとこぼれ松葉や月の地	亀水
七夕や塵も流れぬ五十鈴川	旦々
最う雨も照もたのまぬ丝瓜哉	卓丈
穂芒やめぐりくゝて寺の背戸	克亭
天の川嘶す相手は手をひく児	硯水
をり添て見てもたしなや女郎花	花溪
雨風や哀れにたかき高燈籠	五通
つかみやる手あたりもよし今年米	西畝
問ふて行く隣は遠し鶏頭華	屠龍

門違ひした声にやむきぬたかな 恕兮
秋立や菜売が門の高嘶し 如蝸

気性ある髭の尖りやきりくゝす 可庭

冒頭の梅室の発句は、『双玉類題集』(好文堂刊 嘉永3)に、「ふた間み
間団扇拾ひに歩行けり」の形で載る。したがって、この一枚摺は嘉永三
年以前のものか。主催者の可庭は坂可庭である。金沢の俳人が多い。五
通から如蝸までは越中の人である。西畝は殿村の本林家の人で、『春興之
句帖』(弘化4)がある。

〔参考文献〕

- 1、蔵巨水『越中俳諧年譜史』桂書房 平成三年
- 2、坂森幹浩「東岩瀬に残る俳諧摺物」郷土史郷土史『東岩瀬郷土史会
会報』第83号 平成十四年五月)
- 3、大西紀夫「東岩瀬の俳諧」(『東岩瀬郷土史会 会報』第102号
平成19年2月)
- 4、大西紀夫「越中の絵入り俳諧一枚摺と絵師達」(『富山短期大学紀要』
第43巻 平成20年3月)
- 5、大西紀夫「越中の俳諧一枚摺」(『富山短期大学紀要』第41巻 平成
18年3月)
- 6、大西紀夫「越中の俳諧一枚摺を読み解く」1〜5『北日本新聞』平
成18年11月2・9日・12月6・13・20・27日

7、『富山新聞』平成21年11月20日、平成22年5月11日朝刊
(平成22年10月26日受付、平成22年11月11日受理)

富山藩絵師 挿し絵描く

幕末期の富山藩絵師山下守胤が挿し絵を描いた俳諧一枚摺2点が、富山短大経営情報学科の大西紀夫教授(近世日本文学)の調査で10日まで見つかった。2点とともに、金沢市内の古書店で発見され、富山・加賀藩を中心とする俳人が句を寄せている。俳諧をたしなんだ守胤が親交を綴るに俳画を描いたとみられ、守胤の交友を物語る貴重な史料となる。

山下守胤

幕末の俳諧一枚摺



山下守胤の俳画が描かれた2点の俳諧一枚摺



俳諧一枚摺の研究を進める大西教授
＝富山市の富山短大

加賀藩の俳人とも交流

富山短大の大西教授 金沢で2点発見

山中守胤(やまなか もりたか) 1776-1809年 江戸で狩野派の画を学んだ後、故郷の藩に帰る。富山藩の藩主前田利保の命を受け、藩内の多様な俳諧図を収めた「本草通串証図」(厚さ3センチ、長さ15センチ)の挿し絵も担当した代表作「雪中八景図」などがある。

「公務多忙ながら風流人」
2点の俳諧一枚摺 俳諧一枚摺ほとんどはいずれも縦約18センチ、横約5センチで、守胤の印が発見された俳諧一枚摺が挿し絵で、大西摺のうち1点は、右下に「守胤」とあり、守胤は正月のしめ飾りとエトリの句を寄つた。守胤の句を収めた俳諧一枚摺も、左に富山藩の藩主前田利保の印が押されているが、主として俳句仲間との私的な交流を目的に刷られた一枚摺に、富山藩の藩主前田利保の印が押し絵を施すことは少なかったとみられる。戦災で多くの富山藩関係の史料が焼失したこともあり、守胤が挿し絵を描いた

身(み)の発句に輝き、富山(とよ)多(た)い(い)こと(こと)から(から)同時(同時)期(期)に(に)山(山)藩(藩)、加(加)賀(賀)藩(藩)、大(大)聖(聖)寺(寺)藩(藩)の俳(俳)人(人)29(29)人(人)が(が)出(出)句(句)を(を)詠(詠)んで(んで)いる(いる)こと(こと)が(が)大(大)西(西)教(教)授(授)に(に)よ(よ)る(る)富(富)山(山)藩(藩)の俳(俳)人(人)部(部)屋(屋)が(が)結(結)句(句)を(を)詠(詠)んで(んで)いる(いる)こと(こと)が(が)守(守)胤(胤)は(は)この(この)時(時)期(期)富(富)山(山)藩(藩)の(の)本(本)草(草)通(通)串(串)証(証)図(図)「(「1858年(年)刊(刊)の(の)作(作)成(成)に(に)取(取)り(り)掛(掛)か(か)っ(っ)て(て)お(お)り(り)は(は)甲(甲)の(の)ど(ど)と(と)記(記)され(れ)て(て)お(お)り(り)、大(大)西(西)教(教)授(授)は(は)梅(梅)室(室)の(の)活(活)動(動)時(時)期(期)と(と)照(照)ら(ら)し(し)合(合)わ(わ)せ(せ)ると、1848年(年)に(に)成(成)立(立)た(た)れ(れ)た(た)富(富)山(山)藩(藩)の(の)公(公)的(的)な(な)任(任)務(務)に(に)忙(忙)し(し)い(い)中(中)、俳(俳)諧(諧)仲(仲)間(間)の(の)依(依)頼(頼)に(に)応(応)じ(じ)た(た)挿(挿)し(し)絵(絵)に(に)見(見)ら(ら)れ(れ)ない(ない)が(が)同(同)方(方)に(に)句(句)を(を)寄(寄)せ(せ)た(た)人(人)物(物)が(が)取(取)れ(れ)る(る)こと(こと)と(と)み(み)ら(ら)れ(れ)る(る)。